

第13回 豊川流域圏自然再生検討会

第11・12回 検討会における主な意見と対応

重要種に係わる情報等については、原則非公開とさせていただきます

令和2年9月29日

国土交通省 中部地方整備局 豊橋河川事務所

第11回 豊川流域圏自然再生検討会（H31.3.13）

自然再生事業モニタリング調査結果に対する主な意見と対応（1）

項目	主な意見	対応状況
下流部再生 （ヨシ原再生） について	- 元々ヨシ原がなかった放水路と、ヨシ原があった本川では、再生したヨシ原の性格が異なるため、評価は分けて行うこと。 - 鳥類の種数・個体数については、増加傾向が明瞭にみられないので、今後もモニタリングを継続して傾向を把握すること。	- 調査結果を踏まえ、本川と放水路のヨシ原面積変化を分けて整理した（資料-2）。 - モニタリングを継続し、鳥類の種数、個体数の変化傾向を把握した（資料-2）。
河口部再生 （干潟再生） について	- 自然干潟よりも施工干潟でハマグリが多いことについて、近年の三河湾全体の変化を考慮して考察する必要がある。 - 魚類調査結果について、種類別に減少傾向を整理し、考察すること。 - 今後の魚類調査については、小型定置網や碎波帯ネットでは十分に把握できない甲殻類も対象として、モニタリング手法を検討すること。	- 第12回検討会（R1.10.3）において対応済み（これまでの調査結果を踏まえ、ハマグリ の 個体数の変化傾向について考察した。また、魚類の出現傾向を、種類別に整理考察した）。 - 令和元年度に試行的に水流噴射式ネットを用いて甲殻類の採集を行った（資料-3）。
	生物多様性の観点から、干潟生態系構成種である甲殻類の評価は重要であるため、モニタリングを行うと良い。	継続して行っている底生生物調査において甲殻類の出現状況に留意してとりまとめた（資料-3）。

第11回 豊川流域圏自然再生検討会（H31.3.13）

自然再生事業モニタリング調査結果に対する主な意見と対応（2）

項目	主な意見		対応状況
河口部再生 （干潟再生） について	■■■■■	・ 干潟の掘削箇所の土砂を造成に用いるにあたって、貝類の生息にとって良好な粒径となっているか、事前調査で確認すること。	・ 第12回検討会（R1.10.3）において対応済み（掘削箇所と造成箇所の粒度組成を確認した）。
	■■■■■ ■■■■■	・ 三河湾の貧酸素水塊という広域データと、河口部の溶存酸素のデータの関連性をみるために、水質の連続観測が必要である。	・ 大規模な調査になるので、検討中。
アサリ着底稚貝 調査について	■■■■■	・ 3季目調査では、潮汐周期と上流域からの稚貝の移動に着目して調査頻度・地点を検討することが必要である。	・ 第12回検討会（R1.10.3）において対応済み（三河港湾事務所と連携して、河道部から河口部、海域への稚貝の移動に着目した調査計画を検討した）。
総括	■■■■■	・ 10年近くモニタリングを継続してきて興味深い事象をとらえることができている。今後はモニタリングの目的を見直し、焦点を絞ったモニタリングに移行してもよいと思われる。	・ 検討会でご意見を頂きながら対応していく。

自然再生事業モニタリング調査結果に対する主な意見と対応 (1)

項目	主な意見	対応状況
河口部再生 (干潟再生) について	・ 粒度組成は経年的に大きく変化していないと考察しているが、施工干潟では粒度組成が変化しているようにもみえるため、考察の表現を改めること。	・ 底質の状況を年平均で整理し直し、変化傾向を考察した（資料-3）。
	・ 細砂分が多い場所でハマグリ の 個体数が多い傾向がみられる。干潟造成後の粒度組成や強熱減量の変化と、それに伴う有用生物種の個体数の変化について考察すると良い。	・ アサリ、ハマグリ の 個体数と底質の粒度組成や強熱減量の経年変化の関係を解析し考察した（資料-3）。
	・ 主に貝類を採餌するスズガモ（鳥類）やカレイ（魚類）の減少要因と底生動物の変化傾向を整理し、河口干潟の餌環境の変化を考察すると良い。	・ 底生動物と魚類・鳥類の経年変化を比較し、河口干潟の餌環境について考察した（資料-3）。
	・ 干潟の造成を予定している範囲でアサリの個体数が多いため、工事の是非を慎重に判断すること。	・ 令和元年度のアサリの生息状況を踏まえ、工事計画を検討した（資料-3）。
	・ 魚類調査について、干潟造成等による生息場の変化に伴う変化を比較できる調査手法を検討し、考察すること。	・ 干潟の施工時期と魚類個体数の関係を整理して考察した（資料-3）。

自然再生事業モニタリング調査結果に対する主な意見と対応（2）

項目	主な意見		対応状況
アサリ着底稚貝調査について	■■■■■	・ 植物プランクトンの調査結果から、アサリ等の生物資源にとって豊川河口部の餌料は十分であったと考えられる。今後の調査において、河口部と海域部の着底稚貝や植物プランクトン量の推移を比較し、分析をすること。	・ アサリ着底稚貝や植物プランクトン、栄養塩の状況を河口部と海域部で比較、分析した（資料-4）。
	■■■■■	・ 流況の連続観測位置は、事前に対象範囲の流況をADCPで把握した上で決定した方がよい。	・ ADCPを用いて河口部の流況を面的に把握し、代表的な地点で連続観測を行った（資料-4）。